

■（８５）中学生を前に考えた新聞の進路

長野県の中学校で生徒に話をする場をもらった。演題は「東日本大震災を数字だけで片付けていいのか」。死者・行方不明 2 万人とだけでは、被災者一人ひとりの生きてきた証が見えない。そんな被災地の記者たちの思いを整理して伝えたかった。

宅配制度に支えられる日本の新聞の書き方は長い間、毎日読んでいただいていることが前提となってきた。そのため記事は日々のニュースが中心になる。それまでの経緯をまとめて全体像を伝えるのは、連載など大型の企画記事や震災 1 年のような節目の紙面になる。インターネットの世界を中心に、ニュースを伝える手段が数多く登場した今、記者、新聞社にも意識改革が求められている。ある記事に関心を持ってくれた人が、その後の記事もチェックしてもらえる仕組みはないのか。過去の関連する記事をまとめて読んでもらえる方法は？そもそも記事が、翌日に古新聞になるのは筆者としても寂しい。新しいツールはないのか。

各新聞社はネットの世界を中心に新たな伝え方を模索している。終わりのない震災報道をまとめてみた話を中学生にしながら、新聞の進路をも考えてみた。（山）